

呉錦堂を語る会通信

NO.31 Dec. 2016

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員
発行日 2016年12月15日



呉錦堂、移情閣、孫文が登場する陳舜臣著『囚人の斧』

呉錦堂、或いは移情閣が登場する文学作品として、『通信』第26号で獅子文六の『バナナ』を、第29号で村松梢風『近世名勝負物語』「黄金街の覇者」を取り上げました。本第31号では、陳舜臣『異郷の檻のなか』(中央公論社 1971年)収録の中篇、「囚人の斧」(初出は「オール読物」1969年6月号)をみていきます。なお、原文引用については、陳舜臣アジア文藝館の許諾を得ております。(編集委員 橋 雄三)

《1. はじめに》

陳舜臣は、『異郷の檻のなか』の「あとがき」で、「ここに百枚前後の小説を四篇あつめた。中篇集ということになるのか。すべて中国および中国人に、なんらかの意味で関係のある作品ばかりである」と述べています。

また、続けて、「なお本書に収録した作品のなかには、事実ヒントを得て書かれたものもあるが、モデルというほどには密着していない。本筋において、フィクションである。モデルに対する興味で読まれるのは、作者の本意とするところではない」と記しています。『通信』編集委員の心が見透かされているようです。編集委員としては、神戸ゆかりの作家で、移情閣や孫文とも縁のある陳舜臣の作品に、呉錦堂、孫文、移情閣といった固有名詞が出てくることに欣喜したのですが。

よく知られた一枚の写真があります。

1913年3月14日、舞子の自らの別荘前、居並ぶ神戸華僑、財界名士のなか、前列中央、孫文の横に誇らしげな呉錦堂が写っております。「囚人の斧」はこの写真の裏にあった一つの出来事を描いています。裏にあった出来事、それはフィクションですが。



『孫文先生東游紀念写真帖』より

《2. 舞台及び登場人物》

ハイライトの舞台は、呉錦堂の舞子の宏壮な邸と松林などその周辺です。

次は、主たる登場人物です。

まずは、実在の人物。

呉錦堂：鐘紡株をめぐっての「鈴久事件」から始まり、故郷慈谿での治水事業・学校設立、小東野開拓事業、そして、物語のハイライト、舞子の邸での孫文歓迎宴など、中篇小説ながら、相当なページを割いて語られています。

孫文：孫文の呉邸訪問へ至るプロセス・時代背景として、中国広東省惠州での「革命軍拳兵」、安徽省での徐錫麟の「暴動」失敗、浙江省での女革命家秋瑾の処刑、辛亥革命勃発、孫文臨時大總統就任、中華民国樹立、袁世凱臨時大總統就任、孫文全国鐵路督弁就任などについての記述があります。

このような呉錦堂の事蹟、並びに中国革命を中心とした時代背景が語られる合間に、架空の人物として、呉錦堂に日本への留学機会を与えられた二人の青年、呉育雲と曹永忠、そして、呉邸に住む若い女性菊代の絡みが割って入り筋が進みます。

架空の人物3人を説明します。

呉育雲：主人公の青年。呉錦堂にその才を認められ、日本へ留学。しかしそのことが呉錦堂に対する負い目、心の負担となり悩む。東京での留学を終え、舞子の呉邸に住む。菊代と男女の関係になる。

曹永忠：呉錦堂にその才を認められ日本へ留学。一旦、中国に帰り、呉錦堂の中国での事業を手伝っていたが日本へ戻り、呉邸に住む。菊代に気がある。孫文暗殺を計画、実行に移すが失敗。

菊代：呉邸に住む。呉錦堂と関係のあった芸者の縁続きの娘。呉育雲に積極的に近づく。

《3・「囚人の斧」、題名を考える》

どうして「囚人の斧」というような不思議な題名が付いたのでしょうか。作品の中から該当しそうな箇所を引用します。

(鈴木久五郎に敗れた) その年、呉錦堂は墓参のため、故郷に帰っている。(中略)

彼の故郷は、浙江省慈谿県だった。(中略) つねに水害に悩まされた。

呉錦堂には悲願があった。

郷土の治水である。(中略)

治水計画を具体化する日のために、災害の実情を知っておかねばならない。

そのとき同行したのが、日本人技師の島総彦と呉育雲という少年だった。(中略)

日本から帰った郷土出身の富豪は、ふと思いついたようにたずねた。

「育雲、おまえいくつになった?」

「十七です」

「そうだな。そろそろ日本へ勉強に行ってもいいころだ」

「はい」

「鳥さんのように、土木技師になるんだな。そして、この川をりっぱに直してくれ。つよい堤防を築いてな。これしきの水にはびくともせんような

…」(中略)

上海の学校へ送られるときも、呉育雲はおなじ人からおなじことをきかされた。

「おまえは神童と呼ばれている。きっと優秀な技師になれるだろう」

神童は大袈裟だ、と呉育雲は思った。

村塾で、ほかの少年よりも、はやく、そして正確に、四書五経が暗誦できたにすぎない。記憶力はたしかにすぐれているが、理数系統の才能はあやしいものである。上海の学校で、彼はそのことを痛感したのであった。

自信がなかった。

彼はおぼろげとかなずいた。(中略)

「おまえの家は貧しい。わしが村を出たころ、わしの家はちょうど、いまのおまえの家ほどの暮しむきだったよ」

それがいまは という含みが、言外にあったのはいうまでもない。

(おれはダメだな。とても錦堂さんようにはなれない)

少年は心の中で、そう呟いた。(中略) 彼はいま悩んでいる。

少年時代の呉錦堂がもったかもしれない悩みとは、まるで異質のものであるはずだった。村を出た呉錦堂は、すくなくとも自分の意思で将来の道を選べることができた。いまの呉育雲にはそれができない。後援者は特殊な目的をもって、学資を出していたのである。

土木技師。

どうしても自分の性格に合いそうもない。

だが、彼の前途はそうきめられていた。

(牢獄にいれられたようだ)

それが呉育雲の悩みだった。

囚人として生きねばならない。

次は「斧」の意味です。

呉育雲は、東京での四年間の留学が終わると、神戸に呼ばれます。呉錦堂は彼を郷里の治水工事

要員として学問させたのですが、郷里に帰す前に、その時期、始めていた、現在の神戸市垂水区神出町小束野の開拓事業の手伝いを命じます。

呉育雲は舞子の呉邸に住み込み、毎日、小束野へ通います。引用します。

小束野では、毎日、斧と鋸の音がして、ときどき伐られた松の巨木の倒れる音がまじった。近所に製材所がつくられ、(中略)

呉錦堂は小野田セメントと尼崎セメントの大株主であった。小束野の松の木は、製材所でセメント用の樽につくられてセメント会社に送りこまれていたのである。

(中略。次の行、「彼」は呉育雲を指す) 翌朝、彼は起き抜けに小束野へ行き、労務者のバラックから斧を持ち出した。

そのあたりで一ばんふとい松の幹めがけて、彼は力まかせにその斧を振りおろした。

がッ!と斧が幹に食いこみ、その手こたえは、腹の底まで響きを伝えた。彼はそれをくり返した。

振り下ろす斧の先に、呉育雲は何を見ていたのでしょうか?

松の幹か、菊代との情事の余韻か、曹永忠か、それとも、自身の境遇か?



小束野の製材所 藤井昭三氏所蔵

《4・孫文と呉錦堂、心の距離》

物語のハイライト、孫文の呉邸訪問の日を追ってみます。引用します。

呉錦堂みずから、家人や使用人を指揮して、賓客歓迎の準備をした。

「なによりも、写真の準備に手抜きがあつちやいかんぞ」

と、彼は念を押しした。

即物的な彼は、この一門の光栄を、形あるものとして遺しておきたいと思つた。それには写真がなによりなのだ。邸の前で孫文を囲んで写真をとる。孫文の隣に坐るのは、いうまでもなく呉錦堂でなければならぬ。

「いいか、孫文先生がここだ。そしてわしはその左隣だ」

呉錦堂は前もって、その場所を指定した。

使用人たちは、椅子の置き場にするしをつけておいた。元大統領の舞子訪問のハイライトは、記念撮影にあつたのである。

(中略)

写真師はもう一時間も前から、写真機を据えて待機していた。

(中略)

呉錦堂の邸の南むきの部屋で、孫文は安楽椅子に背を預けて、海をみていた。

「東京で鈴木氏にお会いになつたそうですね？」

と、呉錦堂はおすおすとたずねた。

「会いました」と、孫文は答えた。「奥さんがまもなくお目出度なので、私の名前の一字をほし」と言われましたね。文という字ですよ。もちろ



「囚人の斧」ほか、計4篇を収録

んよろこんで承知しました」

鈴久は孫文の亡命時代、革命資金に十万円を寄付していた。いまはおちぶれているが、国賓の孫文に会つても、生まれてくる子どもの名前のほか、なにも要求しなかつたのである。

「そうですね……」

呉錦堂は、裏長屋に住んでいるという、かつての仇敵のじめめなありさまを、孫文の口からきこうと思つていたので。

目が合った。孫文はほほえんでいた。しかし呉錦堂は、その眼に心の底まで射抜かれたような気がした。

「しばらくお休みになつてから、玄関のところ写真をとりますよ」

と、そばから随員の一人が言った。

「写真……ああ、それはいいですな」

孫文は呉錦堂をかえりみて、呟くように言った。(あなたとの関係は、写真にでもとっておかないと、なにも残らない) 傍線は編集委員

呉錦堂は孫文の呟きのなかに、そんなことをきく思いがした。彼は自分が孫文のまえで、みるみる縮んで、小さくなって行くように感じた。

上記引用文中の傍線部分は厳しい言葉です。主人公の青年、呉育雲に、

(牢獄にいれられたようだ)

囚人として生きねばならない。

と言われたり。存命なら、著者の本心を聞きたいところですが、聞いたところで、「あとがき」にもあるように、「事実にヒントを得て書いてはいますが、モデルというほどには密着していません。本筋においてフィクションです。モデルに対する興味で読まれるのは、作者の本意とするところではありません」と軽いなされそうですが、あと少し補足して、終わります。

孫文が、呉邸の南むきの部屋で、安楽椅子に背を預けて海を眺め、呉錦堂が、孫文を囲んだ集合写真の準備に気を配っている頃、呉邸に続く松林の中では、孫文をねらう曹永忠が、拳銃で狙いやすい場所、自身の動作を確認していた。

ぶらりと散歩に出た呉育雲は、根上がり松の林のなかで、そんな曹永忠と出くわし格闘となる。

呉育雲に殺意はなかつたが、結果的には曹永忠を殺すことになつてしまふ。呉育雲は、孫文警備の巡査につかまらぬが、正当防衛が認められ、釈放される。

そんなできごとに気付くことなく、呉邸の正面玄関の前では記念撮影が行われていた。

(根上がり松の林)



『兵庫県立舞子公園百年史』より

呉錦堂と孫文の関係

本号3頁で取り上げた『囚人の斧』の一節、孫文が呉錦堂に、おちぶれている鈴久に会ってきた話をし、続いて、松海別荘前で記念写真を撮る件(くだり)、陳舜臣は次のように描いています。

「写真。……ああ、それはいいですな」

孫文は呉錦堂をかえりみて、呟くように言った。

(あなたとの関係は、写真にでもとっておかないと、

なにも残らない)

呉錦堂は孫文の呟きのなかに、そんなことばをきく思いがした。彼は自分が孫文のまえで、みるみる縮んで、小さくなって行くように感じた。

小説とはいえ、なんともしげしい言葉です。この辺りを探ってみたいと思います。

(編集委員 橘雄三)

《1. 呉錦堂別荘前、孫文を囲んだ集合写真の背景》

本号1頁に取り上げた写真、つまり、松海別荘前、居並ぶ神戸華僑、財界名士の中央に孫文と呉錦堂が並んだ集合写真が撮られた時期、孫文主導の中国興業株式会社に見られる日中経済提携の計画が進んでいました。

1912年4月、孫文は中華民国初代臨時大総統の職を袁世凱に譲り、自らは、三民主義のうち民生主義の実現のため実業の振興に全力をあげると表明します。その最たるものは「全国鉄路督弁」という職名の地位について鉄道敷設にのりだしたことです、その資金調達を担うのが中国興業株式会社でした。

呉錦堂にとって、中国への有望な投資先を提供してくれる日中合弁のこのプロジェクトは十分に魅力的であったにちがいません。具体的には、同社の株式一覧表(中国側)に「義生洋行 500株」、同(日本側)に「呉錦堂 300株」とあります(この箇所、孫文記念館の展示より)。

孫文は、1913年2、3月の来日中、東京で、中国興業株式会社の設立に関し、渋沢栄一らと協議をおこなっています。呉錦堂が孫文を自らの別荘に招待した背景には、国民党神戸交通部々長という立場もあったでしょうが、孫文主導で進む中国興業株式会社への期待も大きかったと思われる。

ところで、この計画は、第二革命失敗後、袁世凱の介入にかかわる中日実業株式会社に改組され、孫文周辺の人々は同社から排除されます。ところが、呉錦堂は、なお、中日実業株式会社の設立計画に望みを託し続けます。このように見てくると、中国興業株式会社への投資計画も孫文支援とは別の次元で考えなくてはならないようです。

同じく経済人とはいっても、多額の資金援助を続けた梅屋庄吉や武器弾薬・兵士の輸送に船舶を提供した三上豊夷の孫文支援とは異なるようです。

もし、呉錦堂が孫文に資金援助ほか、直接的な支援をしたという事実、並びにそれを裏付ける資料があればご教示ください。

《2. 呉錦堂と孫文の出会い、そして心の距離》

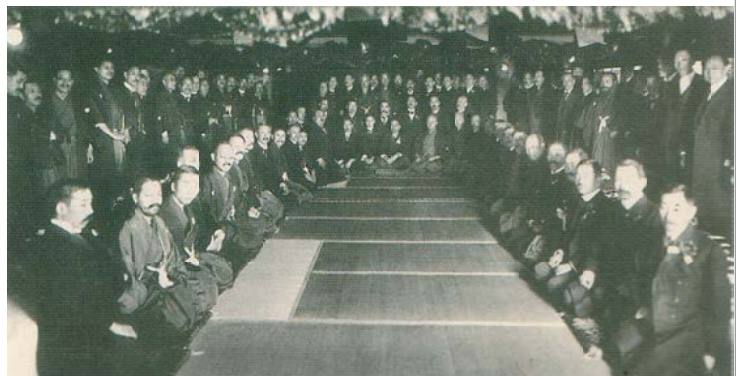
孫文は、約30年間日本と関わり、通算約9年間で日本で過ごし、18回、神戸に来たといわれています。

ところで、呉錦堂と孫文の出会いを証拠づける資料といえば、本号1頁にあげた松海別荘前での集合写真、同日、常盤花壇で開かれた神戸市主催孫文歓迎会での集合写真(この頁の下に掲載)ほか、この来神時に撮影した数葉の写真しか思い浮かびません。

このあと、孫文は第二革命に敗れ、1913年8月、日本へ亡命します。8月9日、「夜陰に乗じて」神戸に上陸し、その後一週間、諏訪山温泉に潜居したという出来事は、よく語られます。この時、孫文を援けた神戸人士として、三上豊夷、松方幸次郎、王敬祥、楊寿彭らの名があがりますが、春には孫文を別荘にまで招き歓迎した呉錦堂はどうしていたのでしょうか。(この段落、2013年孫文記念館発行『孫文先生諏訪山潜居の地』記念銘板について)に拠る)

また、「大アジア主義」講演で有名な1924年11月の孫文来神時、孫文を訪問した関係人士的なかにも呉錦堂の名前はありませぬ(2011年孫文記念館発行『孫文・日本関係人名録』「表9 孫文訪問人名一覧表」)。

陳舜臣著『囚人の斧』の「あなたとの関係は、写真にでもとっておかないと、なにも残らない」という表現は正鵠を射ているのかも知れませぬ。



1913年3月14日 常盤花壇での神戸市主催孫文歓迎会
呉錦堂も副賓として出席 『孫文先生東游紀念写真帖』より